



デュルケーム／デュルケーム学派研究会

Japanese Association for Durkheimian Studies

ニューズレター 第14・15合併号〔2014年12月25日発行〕

会長 大野道邦 <mitikuni@mua.biglobe.ne.jp>

郵便振替口座番号：00980-4-20999

編集事務局 奈良女子大学文学部

(口座名称) デュルケーム研究会

TEL 0742-20-3264, 3259

編集

中島道男

江頭大蔵

小川伸彦

<mnakajima@cc.nara-wu.ac.jp><egasira@law.hiroshima-u.ac.jp><ogawax@dream.com>

デュルケーム／デュルケーム学派研究会の趣旨

世紀転換期のグローバルなレベルにおける社会的、文化的な変化の中にあつて、最近、国際的にも国内的にも、デュルケームやデュルケーム学派の業績の再評価の機運が高まってきている。わが国においても、若い世代を中心としてデュルケーム／デュルケーム学派に関心を抱く研究者が増えつつある。

このような状況を考慮に入れつつ、前世紀転換期の古典であるデュルケーム社会学、および、その発展型としてのデュルケーム学派について調査・研究することによって、現世紀転換期の社会・文化・人間の構造や動態を分析・説明・解釈するための基礎的・原理的なパースペクティブを明らかにしたい。このために、相互啓発的な研究会を定期的開催する。

第26回研究例会（2013年4月13日、熊本大学 黒髪北地区キャンパス）

第1部：

報告 中倉智徳 氏（日本学術振興会・大阪府立大学）
ラトゥールとタルド——人類学の「静かな革命」とモナド論

コメンテーター：北垣 徹 氏（西南学院大学）

第2部：デュルケーム没後百周年企画について

報告 小川伸彦 氏（奈良女子大学）
岡崎宏樹 氏（京都学園大学）
科学研究費助成申請書案の検討を中心に

第27回研究例会（2013年10月5日、キャンパスプラザ京都

京都学園大学 サテライト教室）

報告1 溝口大助 氏（東京外国語大学）
モース宗教理論の変遷——「聖性」理論の変化

コメンテーター：飯田剛史 氏（大谷大学）

報告2 林 大造 氏（神戸大学）
モースと社会運動論の現在

コメンテーター：藤吉圭二 氏（高野山大学）

第28回研究例会（2014年4月12日、ナレッジキャピタル内
フジキン高野山大学サロン）

報告1 藤吉圭二氏（高野山大学）
Revue du M.A.U.S.S. No 38 紹介

コメンテーター：林 大造氏（神戸大学）

報告2 中倉智徳氏（大阪府立大学）
Revue du M.A.U.S.S.における「贈与論」受容の傾向

コメンテーター：溝口大助氏（東京外国語大学）

第29回研究例会（2014年10月11日、和歌山大学 教育学部5階第2会議室）

報告1 村田賀依子氏（奈良女子大学）
ブルデューとともに、ブルデューを乗り越える
——ブルデュー理論における主観／客観の関係についての再検討

コメンテーター：中倉智徳氏（大阪府立大学）

報告2 大野道邦氏〔レジュメ参加〕・小川伸彦氏（奈良女子大学）・
山田陽子氏（広島国際学院大学）・吉本惣一氏（横浜国立大学）
デュルケーム命題集への試み

【第26回研究例会報告要旨】

〔報告〕 中倉智徳（日本学術振興会特別研究員(PD)・大阪府立大学研究員）

ラトゥールとタルド——人類学の「静かな革命」とモノド論

社会学、人類学、哲学をまたぎながら、モノ things / chose に注目する複数の重なりあう理論的動向が現在生じていると言われている。人類学における「静かな革命」、社会学における「プラグマティック社会学」、哲学における「思弁的唯物論」と呼ばれるこれらの動向は、「存在論的」なものへ、「現実の記述」へ、「実在論」への転回であるとされ、さまざまなアプローチによって「モノを通じて考える」ことを行なっているのだとされる。そしてその複数の動向のなかで、本報告の対象の一人であるブルーノ・ラトゥール (Bruno Latour, 1947-) が重要人物として言及されている。また、もう一人の対象であるガブリエル・タルドも、この複数の動向のなかで、改めて浮上しつつある。それは、ラトゥールが彼の理論の「祖先」としてタルドを取り上げた影響の結果でもある。

本報告ではこれらの動向を概観しつつ、ラトゥールのアクターネットワーク理論 (ANT) とタルドの議論について、とくにその発明論と死後刊行された「可能的なもの les possibles」論文を参照することで、それらがともに「こうもありえた」可能性を念頭に置いたために新奇なものを対象とすることを可能にした理論であるという観点から検討した。

ラトゥールは2005年の著作『社会的なものを組み立て直す *Reassembling the Social*』のなかで、「社会的なもの」の再定義をおこない、「社会学を作り直す」として、「社会的なものの社会学」と対比させながら、自らの議論を「アソシエーションの社会学」である

と規定する。社会的なものの社会学の祖先としてデュルケムをおき、アソシエーションの社会学の祖先としてタルドをおく。そして社会的なものの社会学が、すでに知られているある種の社会的事実を、どのような社会構造や社会的文脈、社会的制度によって構成されているのかという観点から分析するのに対し、アソシエーションの社会学は、対象とする「現実」を、人間と人間とのあいだの社会的関係だけではなく、モノを含むそのほかのアクターとの関係によっても構成されていると想定する。そのようにして「現実」を構成する集合的なもの＝アソシエーションを広く捉え、そのネットワークを構成しているアクターのネットワークを一つひとつ愚直に、「アリ(ANT)のように」追跡することによって浮かび上がらせるものであるとしている。このような方法論の利点は、例えば「新たなワクチンが市場化された」、あるいは新たな病原菌が出現し伝播したといった、新奇なものの出現に顕著であるが、これまでであったような説明では十分に分析できないと思われる未知のものの分析に有効であるとされる。ラトゥールの ANT は、未知の状況に接した時には非常にプラグマティックなものとして科学人類学にとって大きな利点となっているだけでなく、様々な分野での応用可能性をもっている。

このような実践的な助言を可能にした理論的な基盤はどこにあるのだろうか。ラトゥールの議論は未知のものを前にしたときに愚直になれという以上に、未知のものが出現するという事態を、既知のアクターによる既知のネットワークの切断と既知ではない仕方での新たな接続から構成されていると考える点に特徴がある。このような未知の事態を理解するための形式にこそ理論的基盤もあるのではないかと。

ラトゥールは、ネオ・モナド論と呼ばれるタルドの哲学について、ヒトだけではなくモノにもアクター性を見出すものとして高く評価している。しかし、タルドの社会学が模倣と発明という用語を用いて新奇なものの出現をその分析対象としており、新たなものの発明を、既存のものとの新たな仕方での接続によってなされるものとして理解していた点においてもまた、ラトゥールとタルドは類似している。

さらにタルドにおいては、新奇なものの出現はその社会学理論のなかで論じられているだけではなく、形而上学的な議論としても論じられている。タルドは自らの哲学を形成する過程で「可能的なもの」という論文を残した(死後刊行)。そのなかで彼は、科学が基盤としている、一見して必然的なものと思われる事実や法則が、別用でもありえた可能性を同時に肯定するものでもあると指摘しながら、実証主義全盛の時代に抗して、可能的なものという形而上学的概念の有効性を示そうとタルドは試みている。彼はこの論文のなかで、可能的なものが現実化されたものを超えてつねに過剰にあり、すべての可能的なものが実現するのではなくその一部の可能性だけが実現するという仮説を採っている。科学的発見や新しい生物種がもたらされる変異といった未知のものの現実化を、これまで実現してこなかった可能的なものが現実化することによるものだと理解する。そして注目したいのは、タルドが、現実的なものを複数の可能的なものとの合成 *composée* として考えていた点である。この観点がのちのタルドのネオ・モナド論においても活かされていると考えるなら、そのもっとも有名な文章である「あらゆるモノは社会であり、あらゆる現象は社会的事実である」(Tarde [1895] 1999=2007: 58=163) という主張を、可能的なものとの合成＝社会として現実を理解するものとして解釈することができる。このときタルドのモナド論と、アクターのネットワークによって構成されるものとして現実を理解するラトゥールの「アソシエーションの社会学」との類似性は、モノへのアクター性の付与という点や、新奇なものを検討しようという点を越えて、その理論的な基盤そのものに見出すことができるのではないだろうか。

Latour, Bruno, 2005, *Reassembling the Social: An Introduction to Actor-Network Theory*, Oxford. =2006, Nicolas Guilhot tr., *Changer de société: Refaire de la sociologie*, tr., La Découverte.

Tarde, Gabriel, [1890] 2001, *Les Lois de l'imitation: Étude sociologique*, Paris: Les empêcheurs de penser en rond. (= 2007, 池田祥英・村澤真保呂訳 『模倣の法則』河出書房新社.)

———, [1895] 1999, *Monadologie et sociologie*, Paris: Les empêcheurs de penser en rond. (= 2008, 村澤真保呂・信友建志訳 『社会法則／モナド論と社会学』河出書房新社,

【第27回研究例会報告要旨】

〔報告2〕 林 大造 (神戸大学)

モースと社会運動論の現在

近年の「オキュパイ・ウォールストリート」、あるいは2013年参議院選挙における三宅洋平候補の「選挙フェス」といった社会運動には共通する志向性が見られる。そこにある「他者との対話」を重視する志向性には、合意のテクノロジーでリスクに適当に蓋をするということではなく、経済・政治・教育・福祉・環境という諸機能システム間の調停という含意が認められるだろう。リスク社会では、政治以外の様々な分野での活動が政治的意味を持つ、ベックの用語で言うサブ政治の様相が際立つが、そういった社会状況への個々人の振る舞いとして、上記の潮流は、個人と社会の関係性の再配置という問題設定を提起しているように見受けられる。以上の問題意識にたって、本報告では、モース呪術論を「個人と社会の関係性の再配置」問題を考える手がかりとして捉え直した。

呪術という現象を追求することでモースが理解しようとしたことは、「そこにおいて個人個人が相互にまったく独立独歩であるような集合現象という観念をいかに理解する」とかという点である。出発点にあった議論は、呪術が「効果」effet を求めてなされるということである。これに関連してモースは「料理」を「呪術や呪術理論のなかで大きな地位を占めている最大級の儀礼範疇」と述べる。料理を呪術における最大級の儀礼カテゴリーと呼ぶところに、モースの聖性（宗教性の極致）の方ではなく、日常性（俗）への接近の姿勢がよく現れている。呪術が技術と類縁しながらも、日常とある意味で相即するものとして把握されている。日常（俗）と相即する異質な領域、それは「相即的聖」とでも言う領域である。相即的聖とは、効果・効験を求めてなす具体性の領域であり、その広範な日常性と相即する聖を足場にして宗教的聖は可能となる、という構図である。

技術・科学との類縁により、呪術は具体的で宗教の抽象性から遠ざかり、同時に「個人個人が相互にまったく独立独歩」で、宗教の集合的沸騰からも遠ざかる。まさにここに託されたイメージは、後に贈与論において全面的に開花する。呪術論では贈与に類縁するような呪術のあり方を「特別な資質を持つ人によって執行されたりしない通俗的な呪術」と呼んでいる。我々の社会生活が部分的に贈与慣行のなかでいまだに漂っているということは、このような「通俗的な呪術」の「過去の残存物」のただ中にあることを意味している。モースが呪術において何よりも重視するのは「期待」や「希望」である。つまり「効果を求めてなす」の呪術観である。鍵となるのは「効果」、「実践」を担う個人個人の独立独歩なのである。

確かに我々の現代社会は、贈与慣行に覆い尽くされた互酬性社会ではない。一方で、こうもいえる。呪術が退場し脱呪術化した世界においても、贈与という「通俗的な呪術」は命脈を保っている。おそらくその浸潤の程度は現状維持のまま推移していくだろう。宗教が退場していったように道徳も退場しつつあると三上剛史は述べる（三上, 2003）。しかし、宗教と道徳とが個人を社会に統合しくりつけようとして退場していったのとちがい、呪術はそもそも、ことのはじめから個人を統合的に社会にくくりつけようとしていたわけではない。

すでに見たとおり、呪術は、宗教とその支離滅裂性、荒唐無稽性ゆえに宗教とはかけ離れたものでありながら／にもかかわらず、「諸部分が合してまさに一つの全体をつくっている」ものとして把握されていた。そして、その「全体」を信念として社会全体にも個人にも保持させるのは、それが実効という具体的な賭け金をめぐって支離滅裂・荒唐無稽ながらもリアリティーをもっていたからである。モースが、実践、実効、具体性、通俗、日常性、相即性などといった概念で呪術を描写しようとしたことは、宗教、法、科学、技術といった諸機能システムとの違いを浮き上がらせ、独自の領域を呪術が保っていたことを示そうとしたためである。そういう意味で、モースはルーマン的なシステム論の発想を部分的に持っていたと言えそうである。この機能システムのコミュニケーション・メディアはマナである。そしてかつて人類を覆い尽くしていた呪術システムの内容は、一方で宗

教の形而上学と、神秘主義を脱ぎ捨てた科学・技術と、競争性・戦闘性が抜き取られた贈与慣行へと委譲された。その一方で、「われわれが呪術からいかに遠くにいるように思おうとも実際は依然として呪術から十分に解放されてはいない」。

このように呪術を機能システムとしてその消長を見ること理由は、現代の社会運動、ボランティアが来たるべき新たな意味領域を担った機能システムとして析出されなければならないし、またその胎動が見られるとの問題意識である。合意のテクノロジーでリスクに適切に蓋をするということではなく、敵対する他者とも対話を図ろうとする顕著な方向性。これは統一的に個人を社会にくくりつける方向性ではない。多様に分化した個人それぞれの、各人なりの「実効」をめざした調停である。これが「サブ政治」や「不安による連帯」を駆動するロジックであろう。こうしてみるならば、未だ見ぬ「機能システムとしての社会運動領域」、「機能システムとしてのボランティア領域」のコミュニケーションのあり方は、呪術を理論的モデルとして鍛え上げうるという可能性が考えられる。個人個人が相互に独立独歩（何らかの理念・イデオロギー・道徳・価値観など統合されていない）で、各人なりの実効を願って、相互に対話を重ねていくという呪術的コミュニケーションのありかた。これが昨今の社会運動に見られる志向性との共通底である。

【第28回研究例会報告要旨】

〔報告1〕 藤吉圭二（高野山大学）

Revue du MAUSS, No38, Émancipation, individuation, subjectivation Psychanalyse, philosophie et science sociale (fin) 紹介

Revue du MAUSS (Mouvement anti-utilitariste en sciences sociales) は、アラン・カイエ (Alain Caillé) らによって1981年に始められた研究活動およびその雑誌で、雑誌は1993年の1号 (Ce que donner veut dire: don et intérêt) 以来原則として年2回刊行され、2014年には43号 (Consommer, donner, s' adonner. Les ressorts de la consommation) が発行されている。現在はフィリップ・シャニアル (Philippe Chanial) らが中心となり、雑誌の刊行だけでなくそのウェブ上での公開【<http://www.journaldumauss.net/>】、研究会の開催など精力的な活動を行なっている。雑誌の冒頭には、以下のような雑誌の簡単な紹介文が掲載されている。

財界、官界あるいは思想上の権力にもまたいかなるグループにも属さず、「MAUSS 評論」は社会科学の発展への寄与をめざす営みであり、その入口の多様性（人類学、経済学、哲学、社会学、歴史など）を尊重し、その倫理的、政治学的なあらゆる論点を、特にマルセル・モースの足跡において、受け入れることに関心を持っている。

今回の報告でとりあげたのは38号 (Émancipation, individuation, subjectivation: Psychanalyse, philosophie et science sociale (fin) 解放、個人化、主体化：精神分析、哲学、社会科学 (結))。末尾に (fin) とあるのは、前号 (No 37) が同タイトルの特集だったため。その構成は次のとおり。

I. 個人の解放。精神分析再考 A) 精神分析の栄光と悲惨 B) 治療の機能と効果 C) 疎外と解放

II. 集合的な解放。解放の政治学 A) いくつかの古典的論点への回帰 B) グローバル化体制における支配と解放

結論にかえて

この構成のもと20本の論考やインタビュー記事などが過去の他の雑誌からの再録も織り交ぜて掲載されている。個別の論考に立ち入ることはできないが、精神分析が主たるテーマとなっていることには、社会と人間をつなぐものとしての「精神」およびそのプロセスの社会的な（目に見えるかたちでの）発現としての「身体」が、社会学の重要な関心対象であったことに通じている。序文の「解放へのこの一般的な熱望は個人的なものであると同時に集合的なものだ」という見方からも察せられるように、本号はそれを個人レベルと集合レベルにおける「解放 émancipation」を両にらみにして検討しようとしている。

この「解放」は「抑圧」と対照され、近代の追求課題として位置づけられる（その過程

にフーコーのいう規律化を位置づけることもできる)が、それは同じく序文において、一方で自由主義とマルクス主義が集会的、政治的な解放に関する、他方で精神分析が個人の解放に関するイデオロギーになったというかたちで整理される。

こうした関心からさまざまな視点で考察が行なわれるが、注意すべきは以下の点と思われる。すなわち、自由主義、マルクス主義、精神分析いずれであれ、人間が社会を認識し、また構築するためのひとつの道具と言いうるが、それがいかなる意味での「道具」なのかという点だ。それはもしかしたら「ある目的のために使いこなすことが求められる有用な道具」という見通しのよさばかりではなく、使っているうちにそれまで予期しなかったものが、ことが立ち現れてこざるを得ないような道具でもあるかもしれない。端的には自由主義は他者、マルクス主義は階級、精神分析は無意識という、いずれも集会的、個人的な当事者(主体)には気づかれないものを顕現させる作用を持つ。この作用と理性との関係は、なお解決を求めつづけている。

【第29回研究会報告要旨】

〔報告1〕 村田賀依子(奈良女子大学人間文化研究科博士研究員)

ブルデューとともに、ブルデューを乗り越える

——ブルデュー理論における主観/客観の関係についての再検討

ピエール・ブルデューのハビトゥス概念は、過去が現在の行為を規定するという実践観や、行為者不在の実践のモデルに見える点で批判されやすい。本報告では、ブルデューの議論の検討をとおして、ハビトゥス概念の問題点を乗り越える方法を探った。

まず、行為と過去の関係について検討するために、ハビトゥスの「ヒステリシス効果」に注目した。ハビトゥスとして身体化されている性向や知覚カテゴリーは過去の社会状態の産物であるために、構造が変化するときには実践や認識にさまざまなかたちで「遅れ」が生じる。このヒステリシス効果についてのブルデューの議論を詳しく検討した(『ディスタシオン』や『国家貴族』など)。ヒステリシス効果は、誰にでも同じようにあらわれるのではなく、現在、身近な知り合いから具体的・実際的な情報(学校の実質的・潜在的な価値についての情報など)を得られる人にはあらわれにくい。また、「遅れた」実践や認識が続くとき、ブルデューはその事態をハビトゥスのヒステリシス効果だけでは説明せず、過去に縛られた実践や認識を助長する「客観的メカニズム」の存在——相対的に自律性をもった、肩書の価値下落のペースが比較的遅い市場、すなわち、近い人々のあいだでの肩書の評価が価値下落を「隠蔽」すること——を指摘している。ブルデューは、「遅れた」実践や認識についての説明を、身体化された構造と、現在の条件がどのような実践や認識を促し可能にするのか、この2側面からおこなっている。ハビトゥス、すなわち過去の経験にもとづく主観的構造だけが実践や認識を決めてしまうのではなく、現在の客観的な世界が実践や認識にたいしてもつ影響も重要であることがわかる。

報告では、資本に恵まれた人々がエリートになる過程についても、身体化した過去だけによって彼・彼女らはエリートになるのではなく、現在において客観的に存在する差異や境界によってエリートであることを促される面があることを確認した。

次に、行為者不在の実践モデルに見えるという問題について検討した。ブルデューは、行動の原理は客観的構造とハビトゥスの「共犯関係」のうちにあると論じている(『パスカル的省察』)。これでは客観的構造と身体化された構造のあいだで実践が決まる、行為者不在の実践モデルに見える。この問題点について考えるために、再度ヒステリシス効果について検討した。ヒステリシス効果が実践や認識にあらわれるとき、構造は変化しているため、客観的な構造とハビトゥスのあいだに共犯関係はない。しかし、行為者は主観的なもの(自分のものの見方など)と客観的なもの(身内の「市場」)のあいだに一致や調和を感じているために、「遅れた」実践や認識を維持してしまう。ここから見えてくるのは、

客観的なものと主観的なものの「共犯関係」には、身体化された構造と客観的構造のあいだの共犯関係と、行為者が主観的なものと客観的なものあいだに見出す共犯関係の2つがあり、行動の原理は、行為者が主観的なものと客観的なものあいだに見出す共犯関係のうちにあるのではないかということである。このように考えた場合、行為者は、身体化されたものと客観的なものあいだで共犯関係を見出す存在と位置づけられる。

ハビトゥス概念の問題点を乗り越えるヒントは、ブルデュー自身の議論のなかにある。そのとき鍵となるのは、「客観的なもの」である。ハビトゥスによる実践は、しばしばそう理解されるように、身体化された過去から（だけ）導き出されるのではない。現在の「客観的なもの」に実践や認識がいかん支えられているかに注目し、この「客観的なもの」とは何かを明確にすることで、ブルデューともにブルデューを乗り越え、ブルデューの理論をより豊かなものとして理解・発展させることができるだろう。

【 会 員 業 績 】

- 安達智史, 2013a, 「『超』多様化社会における信仰と社会統合——イギリスにおける若者ムスリムの適応戦略とその資源」『ソシオロジ』177: 35-51.
- , 2013b, 『リベラル・ナショナリズムと多文化主義——イギリスの社会統合とムスリム』勁草書房.
- 江頭大蔵, 2014, 「社会関係資本と現代日本の自殺傾向について」『社会分析』41: 47-66.
- 大川清丈, 2013, 「[書評と紹介] 石堂彰彦著『近代日本のメディアと階層認識』(吉川弘文館)」『日本歴史』785 (2013年10月号): 122-124.
- , 2014, 「『試験』からみたウェーバー比較歴史社会学」『帝京社会学』27: 39-53.
- 太田健児, 2013a, 「フランス思想史からみた服部遺文庫の意義——フランス第三共和制期(1870-1940)における“社会思想”の再構成をめざして」『尚絅学院大学紀要』65: 43-47.
- , 2013b, 「フランス第三共和制期世俗的道德教育論の諸相Ⅸ——『フランス教育思想史』」『尚絅学院大学紀要』66: 49-60.
- , 2014a, 「ポスト“ポスト 3.11”——震災後にみえてきたもの」『尚絅学院大学紀要』67: 5-9.
- , 2014b, 「フランス第三共和制期世俗的道德教育論の諸相Ⅹ——デュルケム後期道德教育論Ⅰ: 『宗教生活の原初形態』」『尚絅学院大学紀要』67: 93-106.
- , 2014c, 「二つのエビデンス・信条・生成・再帰的日常・物語化——政治的なるものと社会的なるものとを構成するもの」『日仏社会学年報』25: 25-37.
- Ohno, Michikuni, 2013, “Sorokin Revisited: The Fate of Grand Theory or the Possibility of Cultural Sociology,” *Memoirs of Kyoto Tachibana University*, 39: 1-18.
- 大野道邦, 2013, 「ソローキン、パーソンズ、そしてデュルケム——文化社会学の諸相」『京都橘大学大学院文化政策学研究科研究論集』7: 17-33.
- 大野道邦編, 2013, 『文化社会学の可能性——ソローキンをめぐって』2010-2012年度科学研究費補助金研究成果報告書, 京都橘大学.
- 大野道邦/コルネーエヴァ・スヴェトラナ, 2014, 『ソローキン再訪——文化社会学の可能性』書肆クラルテ.
- 岡崎宏樹, 2014, 「ポピュラー音楽の社会学」井上俊編『〈全訂新版〉ポピュラー文化を学ぶ人のために』世界思想社, 132-46.
- 荻野昌弘・三上剛史・北垣 徹, 2014, 「社会の余白で考える: モースの贈与論をめぐって」『日仏社会学年報』25: 53-88.
- 菊谷和宏, 2013, 「永井荷風のフランス受容とその社会思想的含意」『和歌山大学経済学会研究年報』17: 31-61.
- , 2014, 「永井荷風と日本社会: 続・永井荷風のフランス受容とその社会思想的含意」『和歌山大学経済学会研究年報』18: 53-76.
- 金瑛, 2013, 「記憶における時間意識——アルヴァックスの記憶観をめぐって」『日仏社会学年報』24: 103-15.
- 白鳥義彦, 2013a, 「フランスにおける『研究・高等教育拠点(PRES)』」『紀要』(神戸大学文学部) 40: 119-140.
- , 2013b, 「フランスにおけるバカロレア試験——近年における動向とともに」『社会学雑誌』(神戸大学社会学研究会) 30: 61-77.
- , 2013c, 「フランスにおける地方的世界——アキテーヌ地域圏・ボルドーを事例として」藤井勝・高井康弘・小林和美編著『東アジア「地方的世界」の社会学』晃洋書房, 54-70.
- , 2013d, [翻訳] リュック・ボルトンスキー/エヴ・シャペロ著, 三浦直希・海老塚明・川野英二・白鳥義彦・須田文明・立見淳哉訳『資本主義の新たな精神』(上・下) ナカニシヤ出版(担当: 第三章、第四章、上巻 241-352、398-429).
- , 2013e, 「公開研究会報告: 日仏大学改革の比較研究」『日仏教育学年報』19(通巻番号 No.41): 87-88.
- , 2013f, 「海外寄稿紹介」『社会学雑誌』(神戸大学社会学研究会) 30: 221-222.

- , 2013g, 「『試練』について」『研究会ニュース』(神戸大学社会学研究会) 29: 1-2.
- , 2014a, 「ルイ・リアールとフランス第三共和政の高等教育改革」『紀要』(神戸大学文学部) 41: 143-158.
- , 2014b, [翻訳] フランソワ・ミュレール著, 白鳥義彦訳「早期離学者たち、間違いなくフランスおよび他国の学校における課題」『日仏教育学会年報』20(通巻番号 No.42): 6-21.
- , 2014c, 『日本およびフランスの高等教育改革に関する学際的比較研究』2011年度～2013年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書, 神戸大学, 1-253.
- , 2015, 「開催校(神戸大学)シンポジウム『古典と現代——社会学におけるデュルケム学派の今日的意義』」『日本社会学会ニュース 2015.1.15, No.213』: 14-16.
- 杉谷武信, 2013, 「[研究例会報告] デュルケムの有機的連帯概念についての研究——パーソンズによる有機的連帯概念の解釈をめぐって」『社会学史研究』35: 89-91.
- , 2014, 「有機的連帯概念におけるデュルケムの思想的主張について——パーソンズによる有機的連帯概念の解釈上の問題点をふまえて」『社会学論叢』180: 19-36.
- Tada, Mitsuhiro, 2013, “Edmund Husserl in Talcott Parsons: Analytical Realism and Phenomenology,” *Human Studies*, 36(3): 357-374.
- 多田光宏, 2013, 『社会的世界の時間構成——社会学的現象学としての社会システム理論』ハーベスト社.
- 田中拓道, 2013, 「連帯の思想——福祉国家の哲学的基礎」宇野重規編『岩波講座政治哲学第6巻 近代の変容』岩波書店, 201-222.
- , 2014, 『よい社会の探求——労働・自己・相互性』風行社.
- 鳥越信吾, 2013a, 「A.シュッツにおける時間論」『社会学史研究』いなほ書房, 35: 65-80.
- , 2013b, 「A.シュッツにおけるふたつの未来——積み重なる時間の展開に向けて」『日仏社会学年報』24: 89-101.
- 中倉智徳, 2014, 「イノベーション論の批判的検討にむけて——発明の社会学からイノベーション・プロセスの経済学へ」大谷通高・村上慎司編『生存をめぐる規範——オルタナティブな秩序と関係性の生成に向けて』生存学研究センター報告 21, 立命館大学, 239-265.
- 林 大造, 2012, 「東日本大震災における分断と支援への一視点——モース贈与論を手がかりとして」『社会学史研究』34: 21-36.
- , 2013, 「人権という権利領域と法の道具的使用——理想と具体性」『日仏社会学会年報』23: 47-63.
- 古市太郎, 2013, 『コミュニティの再創成に関する考察——新たな互酬性の形成と場所の創出からなる地域協働』早稲田大学出版部.
- 三上剛史, 2013a, 『社会学的ディアボリズム——リスク社会の個人』学文社, 1-161.
- , 2013b, 『リスクと監視と個人化の行方——個人と社会を「切りつつ結ぶ」ことについての研究』平成 21 年度～24 年度科学研究費補助金(基盤研究 C) 成果報告書, 1-73.
- , 2013c, 「リスク社会と“ディアボリックなもの”」『フォーラム現代社会』(関西社会学会) 12: 121-128.
- , 2014a, 「公共圏と親密圏のディアボリズム」田中紀行・吉田純編『モダニティの変容と公共圏』京都大学学術出版会, 31-56.
- , 2014b, 「リスク社会と理論的シンボリズムの隘路」『社会学研究』94: 29-54.
- , 2014c, 「リスク社会と社会学の問い——「フクシマ」という問題」荻野昌弘・蘭信三編著『3・11以前の社会学』生活書院, 245-271.
- , 2014d, 「社会の余白で考える: モースの贈与論をめぐって」(荻野昌弘・北垣徹と共著)『日仏社会学年報』25: 53-88.
- 溝口大助, 2013a, 「セマフォ社会における夫方居住集団(ダアラ)の空間概念と実践」『人文学報』(首都大学東京)468: 29-54.
- , 2013b, 「モース宗教社会学の生成」『宗教研究』86(4): 755-756.
- , 2014a, 「夢を通じた個人史と民族史」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』

- 丸善出版.
- , 2014b, 「モース——社会主義・労働・供犠」市野川容孝編『労働と思想』堀之内出版, 129-154.
- , 2014c, 「アフリカの宗教」櫻井義秀編『よくわかる宗教学』ミネルヴァ書房, 106-107.
- 村田賀依子, 2011, 「ハビトゥス・規則性・変化——ブルデュー社会学理論の可能性」『奈良女子大学社会学論集』18: 151-64.
- , 2013, 「ハビトゥス批判を乗り越える——実践感覚概念に着目して」『ソシオロジ』58(1): 3-18.
- 山田陽子, 2013a, 「[書評]牧野智和『自己啓発の時代——自己の文化社会学的探究』」『社会学評論』63(4): 630-631.
- , 2013b, 「労働者災害補償保険制度における自死の『医療化』と『動機の語彙』——『故意』の存在から『故意の欠如の推定』へ」『現代社会学』14: 3-17.
- , 2013c, 「自死の『動機の語彙』としての『うつ病』——労災保険における『自死=病死=災害死』という構図」『現代思想』41(7): 81-97.
- , 2013d, 「『パワーハラスメント』のフレーム・アナリシス——労働者の自死の『動機の語彙』と『精神障害』フレーム」『現代の社会病理』28: 41-57.
- , 2013e, 「エコノミクスからホモ・コミュニカンスへの変貌——ハラスメントと『感情資本主義』」『現代思想』41(15): 72-86.
- , 2014, 「労働者の自殺をめぐるリスクと責任」『年報 科学・技術・社会』23: 31-57.
- 横山寿世理, 2014a, 「一人ぼっちは本当に怖いのか——2012年代学生調査結果より」『聖学院大学論叢』27(1): 155-67.
- , 2014b, 「アイデンティティの不確定性——固定化から生成変化へ」河島茂生編『デジタルの際——情報と物質が変わる現在地点』聖学院大学出版会, 129-51.

§ 編集事務局より §

ニューズレター第14・15合併号をお届けいたします。ニューズレター合併号は2回目で昨年は1回お休みとなりましたが、研究例会はいつもどおり毎年2回開催され、2013年・2014年ともにそれぞれ例会を開催することができました。2013年4月には多田光宏会員のお世話により熊本大学黒髪北地区キャンパスにて第26回の研究例会、10月には岡崎宏樹会員のお世話でキャンパスプラザ京都 京都学園大学 サテライト教室にて第27回の研究例会を開催することができました。熊本大学での例会ではデュルケム没後百周年企画について検討が進み、この年の6月8日と8月10日に奈良女子大学で読書会を開催し構想を練りました。

2014年4月には藤吉圭二会員のお世話によりナレッジキャピタル内フジキン高野山大学サロンにて第28回研究例会、10月には小関彩子会員と菊谷和宏会員のお世話により和歌山大学教育学部にて第29回研究例会を開催いたしました。第29回例会の第2報告にありますように、本研究会では没後百周年企画の一環として『デュルケム命題集』の刊行を計画しております。研究会の成果を社会や学界に還元すべく、企画・編集を進めております。報告やコメントを担当いただいた会員の皆様、また研究会を支えていただいた開催校関係の皆様へ改めて御礼申し上げます。

さて、次回の第30回研究例会は久々の東京開催です。2015年4月18日(土)13:00～17:30の予定で、古市太郎会員のご尽力により文京学院大学本郷キャンパスにて開催いたします。研究例会の共通テーマは「デュルケムとベルクソン」で、同志社大学大学院の野々村元希会員(「デュルケムの「道徳的個人主義」について」)、そして和歌山大学の小関彩子会員(「デュルケムとベルクソンにおける知性と知性を超えるもの——概念的思考の位置づけ——」)による報告を予定しております。会員の皆様のご参加をお待ちしております。

なお本合併号には、執筆者側の諸般の事情や報告種別の関係上、要旨が掲載されていない報告があることをご了承ください。